おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成31(2019)年
2月号
通巻582号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　平成31年2月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

阿蘇中岳火口　　阿蘇自然守り隊　中島一美さん撮影（文・８頁）

昭和40(1965)年2月3日　玉緒祭法話より

新しい気持ちで春を迎える行事

法主　矢追日聖（満53歳）

一年間の節としての行事

この地方では十二月とか一月よりも、二月の初め頃が一番寒い日が多いです。私がこの山へ入りましたのは昭和二十二年でしたが、もう生駒おろしがきつうございまして、日が照っておっても朝から晩まで氷柱(つらら)が下がっておるような状態でした。それから見れば、最近は何かしら暖かくなりまして、この山で生活するのも楽になってまいりました。

昨日今日はちょっと冬のような感じがしますけど、今日は節分ですね。これを大倭では「玉緒祭(たまのおさい)」と申しておるんです。別に何も、こんな名前付けて、こんな行事しなくてもいいんですけれども、形のある我々人間の生活の、毎年の一つのまあ節(ふし)なんです。例えば朝起きると「おはようございます」、晩寝る時に「おやすみ」とか、また人と会った時に挨拶するとかいう節度の問題なんですね。

節分の行事は、大体、王朝時代に中国から来たものだと思います。古い時代の中国には偉大なる霊感、霊能者がたくさんおられて、きっちり計算して暦を作ったんですね。日本の古代においては日を決めた節分はなかったけれど、自然に親しみが深い生活をしておったから、冬と春はどこかでけじめをつけておったと思います。そういう気持ちのあるところへ中国から来たものでも簡単に受け入れられた。日本に持って来ても日本の神ながらの信仰と非常に密接な関係があったわ

けです。

マガツミを祓い春を迎える

日本の古代においては、冬が終わって春になる、ここらが年の始めと決めておったと思うんです。年の終わり頃になってくると、済んだ前の年の色んなツミケガレ、マガツミを祓って、新しい年を迎えるために、山の中とか川原で禊ぎ祓いの行事をしました。今日が冬の一番最後であって、明日からは春になるんだから、本来の意味から言えば、禊ぎ祓いも今晩やるのが本当ということです。年越しの行事なんですね。

現在はそれが暦の上でお正月になって、元旦が春を迎える日で、十二月三十一日が年の終わりで、仏教的には百八つの煩悩を祓う除夜の鐘をつく。神道の場合でも水をかぶったり神さんに祈ったり、いわゆる禊ぎという行事をやっております。

これは自分個人のマガツミの場合です。

ところが人間が生かされている自然界、人間以外の周囲の環境においてもマガツミがあり邪霊、悪霊的なものもあるんだということですね。そうしたものを祓い清めて新年を迎える、即ち春を迎えるという行事が節分になっているんです。

日本の古典なんか読むと、桃の木で弓を作り東西南北の四方に、葦で作った矢を放つというような形の行事なんです。それが簡略化されて、家の四隅にただ弓の弦をはじいて音を立てるだけのこともあったと思うんです。

私もはっきり知りませんけれど霊界を見てますと、やっぱり桃の木で弓を作っておりますから、何か謂れがあるらしいんですね。葦というのはまた、地球に土が生まれてきた時、一番最初に出てきたのがああした水草であったと思うんです。

『古事記』でも「葦牙（＝葦の若芽）の如く萌えあがる物によりて成れる神の名は宇摩志阿斯訶備比古遅神」という神さんの名前もあるんですよ。

桃の木の弓で葦の矢を四方に放って、それが一年間の冬の禊ぎ祓いの行事なんです。大相撲の弓取り式というのも、そうした流れを汲んで魔除けのために土俵の上を祓っておるんだと思います。

私らの子供の時分にはこの地方でも、節分になるとイワシの頭を箸で門口に刺して、横にひいらぎの葉を付けたりしておりました。これも言霊でね、桃の弓・葦の矢というのが詰まってユ・ア・シ、イワシになってしまうんですね。

要するに節分というのは、一年間のマガツミを祓い清めて新年を迎える、春を迎えるという節の変わり目の行事なんです。

「玉緒祭」の意味

それを大倭では、何故、「玉緒祭」という名称を使っているかという問題ですね。

「玉」というのは、人間の霊魂、タマシイということなんです。ミタマとか言うでしょ。幽霊の火はヒノタマですし。漢語を使えば霊魂、霊ですけれども、日本語では神さんということで、同じ意味なんです。「玉」は我々が生かされている宇宙の霊気から来ておるものなんです。

「緒」は紐なんです。

一年間生き延びてきて、そしてまた今年一年も生き延ばしてもらうという、人間の生命力というものを玉の緒と言うんです。我々が肉体を維持するためには飯も食わなければいけないし、働いたり適当に運動もしなければいけないし、そうして生きているというのは、自分一人で生きているんじゃないんです。天地自然の色々な恵みによって生かされているんです。

この天地自然の気、不可思議な神秘な力、目に見えない一つのエネルギーというものが、我々人間個人に結びつけられておるんですね。それが玉の緒という言葉になるんです。

自分が働いて勝手に生きているのだという考え方ではなく、生かされておるということをやっぱり自覚しなければいけない。言い換えると天地自然と共に我々があるという、自然と人間の本当の一体感に立って自分を眺めていくことなんです。今日一日ではつまらないんですけど、毎日そんなことを考えてればしんどいですからね、年に一度ぐらいは「玉緒祭」として、そういうことをはっきり認識する行事としてのお祭です。

自分の寿命というのは大体ありますけど、命のある間は肉体も心も健康でいけるように努めなければいけない。言い換えれば自分の玉の緒をしっかりと太く丈夫にして、持って生まれた生命力を強化していくということになるんです。悩んだり苦痛を持った心境でおれば、玉の緒は細くなっていくんです。細くなっても、そう簡単には切れませんけれども、病気だとか十分に仕事できないような弱々しい人生で終わってしまうんですよ。

だからして精神的な向上をはかるように自ら修養することが、玉の緒を太く丈夫にしていくことだと、そのように自覚していかなければいけないと思うんですね。

というて、それだけではないんです。霊界と現界の関係というものは複雑怪奇ですから、一方的に簡単に太くなるものでもないしねえ。

言葉にも神さんの霊が働く

色んな複雑な関係の一つには、言霊ということ

があります。言葉にも霊魂が働く。霊魂というのは中国的な言い方ですけれども、日本式に言えば神さんの霊、いわゆる自然の気というものが一つのエネルギーとなって働くんです。

本心でないんやけど口から出てしまったと言うても、声としていったん自分の口から外に出た場合には、その音は、永久に宇宙のどこかに残っておるんです。もうその言葉だけの霊が働くんです。宇宙のどこかにあって動いています。固定していません。

宇宙には端がない、丸いとも言えないし四角いとも言えない、始めがないし終わりがない、果てがないんです。だから行くところまで行ったと仮定したら結局は瞬間に、その言葉は我が自身にまた戻ってくるんです。山びこと同じことなんです。

言い換えれば、それが自分の玉の緒にかかってくるんですよ。人を憎む言葉とか、悪霊的な言葉を出すということは最もいけない、垢が溜まることになるんですね。だから言葉一つでも慎しまなきゃいけません。心にもないのに毒舌を吐くというのも、あんまりよろしくないんです。

そういうように言葉そのものにも霊的な働き、いわゆる神の働きがあるということも、皆心得ておいて欲しいと思います。

そら私自身でもね、ずいぶん毒舌を吐きますよ。自分でも分かってますが、人間だからしょうがないんでね。後で、ああ悪いことを言うたなと反省すれば、また懺悔した波長が流れていきますから、何とか浄化しよるんですよ。仏教の言葉で、懺悔滅罪と言います。年の終わりにミソギしたり百八つの鐘を打ったりするんですけど、平素からお互いに心得として行なってほしいと思います。

霊界というのは、そういうように微妙にできていますから、そう心配したものでもないんです。

言霊が大事

節分の行事で大豆を撒くというのもね、言霊の問題なんです。マメという、そこに言葉の霊が働く。大和地方で、気マメな人といったら機敏に物事を片付けていくような、よう働く健康でピチピチした人を言います。現在は、その言霊を大豆に託して、節分のマガツミを祓うとか悪魔祓いをする行事の時に使うわけです。昔の王朝貴族は桃の木の弓とか葦とかを使ったところを、一般庶民は豆を用いたんだというように学者なんか説明しているかもしれませんが、日本人の考え方というのは言霊が一番大事なんですね。

言葉に神さんが働くということは、一つの気の動きですから、動的なものなんですね。活動状態の問題です。四方に豆を撒いて、節分の日までの冬の間のマガツミというものを全部祓ってしまう。マメの言霊によって、一年間のマガツミは全部どこかに逃げてしまうというわけですね。我々が心も体も健康であれば、すなわちマメマメしくあれば、いかに悪魔であろうが災難であろうがぶっ飛ばしてしまう、そうして新しい春を迎える。我々の心はこうなんです。

例えば結婚式の場合、鯛を焼き物にして使うというのもメデタイという言霊なんです。日本全国どこでも芽出度い時には鯛を供えます。昔から日本は神ながらのね、言霊を一つの神様として信じてきた民族なんです。

古代から日本の国は、書いたものの記録とか、言葉ではさほど説明しませんが、そうした行事とかの形の中に、神ながらの一つの法というもの、神ながらの道の教えが示されてきているんです。

だから正月の芽出度い時には、門松で陰陽一体ということを表しております。陰性のメンと陽性のオンと、一対の門松を立てて祝うという形の中に、汲み取っていくべき真理があるんです。

今日は世間の行事の節分で、元の起こりは中国だと思いますけれども、日本においても春夏秋冬という自然とともに生かされておる節の分かれには行事をやっておったはずなんです。そこへ中国から日にちまで決めた暦を持ってきてくれたんで、またその通り実行してきたんだと思います。

大倭においても自覚を新たにする意味において「玉緒祭」としてお祭りをしております。今日までの一年間を振り返って自分を懺悔するとか、自分のいけないところを直すとか、今の言葉で言えば自己反省をして、新しい年をしっかりやってほしいと思います。

（文責・編集部）

追悼　梅原猛先生のこと　杉本　順一

皆さんご存知の方が多いでしょうが、平成31年1月12日、梅原猛さんが93歳で帰幽されました。大倭とは浅からぬご縁の先生でした。

ご縁の始まりは、学生時代の柴地則之さんと梅原先生の出会いからです。『思想の科学』という雑誌に出ていた梅原先生の「妙好人――浄土文化の一面」の記事が気になった柴地さんが、当時立命館大学で講師をされていた梅原先生に直訴して、同志社大学近くの喫茶店で新聞学研究会の仲間とお話をお聞きしたのです。

後に、柴地さんが大倭に入門して『大倭新聞』を編集することになった時、大倭20周年特集号において法主さんと梅原先生の対談を企画、「世界の未来を拓くカギ」として『大倭新聞』昭和40年7月23日発行第11号に掲載しました（『ことむけやはす㈠　やわらぎの黙示』にも収録）。このことを思い起こして追悼のしるしとします。

あじさいアルバム⑲
「神通力如是」の紹介に先立つて
昭和15・16年頃を中心に

「神通力如是」とは

2012年1月21日、岸田哲・杉本順一さんによってもたらされた大倭教の新資料の発見は、同年2月11日より始まった私を含めた「三人の会」と名付けた新資料を検討する集りの発足となった。

新資料は多岐にわたり、その数も少なくはないが、その幾らかはすでに『おおやまと』紙上に発表済みのものもある（平成26年7～8月号「大倭神宮伝承の紀・後編」、および平成27年10～12月号「大倭大本宮伝承の紀」）。

今回、中でも「一級の資料」ともくされる法主直筆の「神通力如是」と題された資料の紹介を、わずかずつではあるが本年5月号よりはじめていこうということになった。

「神通力如是」は、数少ない太平洋戦争以前の資料であり、大倭教発足の前夜における貴重なものである。内容は昭和16年11月6日～12月8日にわたる、法主の実家、鳥見庄山において突如、霊覚を得られた妙月かあさん（法主の妻、成川静枝）の神語りが中心となっている。私達が大倭教の出発とお聞きしているのは、8月15日の終戦の日だが、実はその出発の根元となる出来事があったことを示す資料である。

太平洋戦争開戦の昭和16年12月8日に「神通力如是」という一つの大きなイベントが終わっている。そして戦争が経過して、終戦の日に仕組まれていたかの様に大倭教のはじまりとなるのだが、この「神通力如是」に至るまでの一連の流れは、昭和11年頃よりはじまっている。それは大まかに次の如くとなる。

昭和11年3月11日　法主、成川静枝と結婚。この頃、聖蹟顕彰運動開始。小谷文済氏とめぐり会う。小谷氏は以後、法主の秘書役となり法主を助ける。

昭和14年2月5日　顕彰運動のため法主は、『金鵄の黎明』を発行。

昭和15年5月3日　政府は、金鵄発祥の地の聖蹟を富雄村、北倭村と定める。

昭和15年6月　成川栄三郎氏や田中菊松夫妻等の助力を得て、東京大久保の「金の玉御殿」を本部とし、「財団法人八紘会」を買収。法主は代表責任者となる。顧問には陸軍大将松井石根氏、陸軍大将小磯国昭氏等。

この頃、小谷氏が鹿島神流十八代師範・国井道之氏を法主に紹介。国井氏は法主を守り助ける。

昭和15年9月6日　大倭神宮は撤去命令事件を経て、新たな構想で再発足することとなる。

昭和15年11月　法主は「東京大神宮」にて血盟団の井上日召氏と対面（当日は日召氏保釈の日）。日召氏は初対面ながら法主に、「私は破壊の使命、あなたは建設の使命」と語る。

昭和15年12月4日早朝　親交の深かった陸軍、石原莞爾京都十六師団師団長（当時）による大演習が、神武天皇東遷時における大倭軍との最終決戦を再現する形で、富雄村を中心に行われた。石原師団長は幕僚を引きつれ大倭神宮に詣でる。この演習には東久邇宮も参加。

同日　大倭神宮の竣工報告祭が執り行われる。後にこの日を「金鵄祭」と定める。

昭和16年9月14日　「金の玉御殿」にて、ドイツ・イタリアの駐在武官をはじめとし、日本各界の錚々たる人士参加のもと、八紘会設立満20周年記念式典、ならびに講演会が挙行される。

昭和16年9月22日～30日　法主は身延山へ。22日夜に「金の玉御殿」にて神拝中、〝至急身延に来てほしい〟という日蓮上人の神示あり。23日着、日蓮と対談。24日、七面山の池の所で七面天女と出会う。

昭和16年10月　大倭神宮の「神有月」。新しき胎動を生み出すべく八百万の神の神議りがあった。

昭和16年10月30日～11月5日　御神託により法主は大倭神宮にて1週間にわたる「真のみそぎ」を行う。（※杉本さんが法主から、「水も食べ物もとらずに行をした」「霊界から食べ物を持ってきよんねん」という話を聞いている）

昭和16年11月6日～12月8日（太平洋戦争開戦日）　妙月かあさんが霊覚を得られ、神がかりにより日々数々の御託宣を述べる。

本紙5月号から、「神通力如是」を紹介するに先立ち、これら一連の法主の動きの一部をたどってみたが、次のページの当時の写真と併せて、さらに理解を深める助けとしたい。（林　修三）

（参考資料）
野草社『ことむけやはす㊀　やわらぎの黙示』・『ことむけやはす㊁　ながそねの息吹』／大倭出版局『法主矢追日聖年表　昭和20年「立教開宣まで」を中心にして』／「神通力如是」

▶昭和15年6月に東京・大久保の「金の玉御殿」を本部とする財団法人八紘会の譲渡を受け、法主を代表責任者として活動を開始する。写真はその神殿での祭典風景。

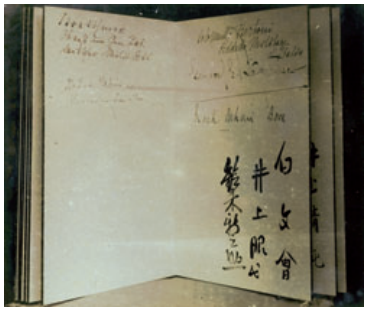
◀昭和15年6月30日、大倭神宮で記念式典が執り行われ、奉納試合が行われた。写真はその時のものと思われる。左は鹿島神流師範・国井道之氏、右は法主弟・矢追隆盛氏。

◀昭和15年12月、陸軍京都十六師団の記念行事で、東遷する神武天皇の軍と大倭軍との戦いの通りに大演習が行われた。写真左は石原莞爾師団長、右端から小谷文済氏と法主様。

▶昭和15年の時期は定かではないが（12月4日か?）、大倭神宮での式典。鳥見山中霊時の碑が真新しい。

▲▼昭和16年9月14日、東京の「金の玉御殿」においてドイツ・イタリア等の駐日武官をはじめ、国内の有力者が参加して八紘会設立満20周年記念式典が挙行される。上は受付の風景、下は受付簿の一部。井上日召氏（代筆）の名前や外国人参加者の名前など見受けられる。

◀昭和15年の大倭神宮での記念写真。右から法主様の父・隆蔵氏、一人おいて母・フジヱ氏、法主様、叔父（政一）の妻・久子氏、前列の椅子の男性の左後方は小谷文済氏。



◀昭和16年9月22日から30日に、神示により法主様は身延山へ呼ばれる。霊界の日蓮上人に〝至急身延に来てほしい〟と依頼される。仁王門の頂にあるノシ瓦が三分の一、中央部分だけ欠落しているのに注目していただきたい。（『やわらぎの黙示』120～123頁参照）

写真説明：岸田　哲

足あと足おと

響きに耳をすませて

神奈川県横須賀市　金田綾子

昨年ある日、突然大学の先生から小包が届いた。中身は十数年前、横浜市立大学を卒業する前に、何とか形にした拙い修士論文が入ったゼミの論文集。タイムカプセルのようで、なぜ今？とびっくりしたが、私はおそるおそる論文のページを開いてみたのだった。修士論文を改めて眺め、私はある文に目をとめた。「筆者は女性が〝祭りは見るものじゃない、やるものだ〟と言いたかったのでないかと考えた」という文章。たぶん、私はその時〝見る〟のではなく〝やる〟ということの中に自分のこれからの生き方があると感じていたのではないか、と今の私には読めた。

当時私は文化人類学のゼミに入り三浦半島の漁村のフィールドワークをしたり、一方で社会福祉の加藤彰彦先生（野本三吉）のゼミにも入り、沖縄に行ったり、色々な人たちと出会ったりした。賑栄い塾に参加したのもその頃だった。大倭へは、祖父が書いた途中までの自伝（のようなもの）を纏める時、祖父が生まれた瀬戸内海の佐島を訪ねた際に寄らせていただくことになる。

大学時代は自分の生活とは別の世界を見て、知ることが楽しかった。けれど修士論文を書き終え卒業を迎える頃には自分が知りたいこと、向き合いたいことは自分の生活の中にあるのではないかと思うようになっていた。生きていく実践の場として、私は特別支援学校での「仕事」を始めることになり、今に至る。主に肢体不自由の子どもたちとの関わりが続き、日々、色んなことを考える。例えば一人一人が違うということ。それでも人は社会の中で生きる時には人と合わせることが必要で何かしらの制約があるということ。あるいは、眠ること（寝る）、食べること（食う）、排泄すること（出す）の重要性。人に触れることの奥深さ、声や呼吸についてなど。普段何気ない生活をしていると当たり前のものばかり。同時に社会の変化の中にある学校というもののあり方や、そこで働くということで求められることについても考える。あるいは医療や教育について。その中で知らないうちに生活自体が何か張りつめて余裕がなくなることもあり、疲れきってしまうこともある。

一方卒業後、私は働きながら「音楽」に関すること（ヴィオラという楽器を弾くこと）を始めた。遡れば小学6年生の頃、学校にできたオーケストラでヴィオラに出会った。中学生の時にはベートーベンの交響曲7番2楽章を繰り返し聴いていた。冒頭はミ～ミミミミ～ミ～、ミ～ミミミミ～ミ～という暗くシンプルな音で静かに始まる。音に備わる魔力のようなものに取り憑かれていたのかもしれない。たった1つの音がこんなにも人の心に届くのは何故なのか。それが高校時代からは体調を崩し、一時期は音楽を聴くということすら全く忘れていた。再び始めてみると、ぐんぐんはまり夢中になっていた。本格的に先生に習いたくなり、相談すると、漢方薬みたいな先生と、即効性がある先生ということで2人の先生を候補にあげてもらったが、私は迷わず、漢方薬みたいな先生を選択した。

レッスンはとっても地味な基礎練習から始まる。少しずつの繰り返しで根気が必要だ。教えているとき先生は「水道管の掃除をしているのだ」というようなことをおっしゃっていた。知らぬまについてしまう癖など、上達の妨げになるような部分を整えて通りをよくする（本来もっている力が発揮されるようにしていく）という意味合いがあったように思う。先生の言うことはすぐにはわからないけれど、後になってこういうことかと、わかることがあった。

亡くなられて数年がたつ。晩年、先生が入院している病院へお見舞いに伺ったとき、私を見ながらゆっくり「弾く楽しみを教えたかったなあ」とおっしゃった。この言葉はズシンときた。それは私が弾くことを楽しんでいない、ということなのか？と。その意味するところがわからないまま、それでも私の何かを見抜かれたような気がした。

「（その人が）もっているものが見える。面白い人と会ったんだ」と言葉少なに交わした会話の内容を今も覚えている。「1ヶ月も病院にいると疲れる。また、レッスンがしたい。治りたいと思うよ」と話していたが、先生と直接話ができたのはそれが最後だった。79歳だった。本当に沢山のお弟子さんや生徒がいる中で、私が学んだのは数年に過ぎないのだけれど、亡くなられた時、この先生からは何かを伝えられたという実感のようなものが残っていた。弾く楽しみについて、私はあれから何か理解できただろうか。その言葉に含まれた意味について今もずっと考え続けている。

「音楽」に関して、素晴らしい先生や演奏家に会う幸運に恵まれ、働きながらも、私は「音楽」を通して出会った言葉をふと思い出す。支えられているという感覚。今の社会は分かりやすく結果が出ることに対して能動的であることが求められがちだけれど、果たして？　私は能動的に選ぶことと、なぜそうなのかわからないけれど、自分が引き受けているものとの間で自分を保っているように思う。最近「能動と受動の創造的交換がなされる場が宗教の世界だと思う」という文章を本で読み、心に引っかかっている。もっともっと見えないものに、耳をすませていきたい。

寸莎

第135回

戸張　岳陽さん

その他の関係性が人を開く

幼稚園の用務員として働きながら妻のあかりさんと精力的にライブ活動を続けている戸張岳陽さん（四十六歳）。二〇一二年以降「アカリトバリ」の名で、特に福島のことに想いを馳せながら演奏をしている。

岳陽さんの母方祖父の出身地は福島の会津であり、あかりさんもまた会津の人である。東日本大震災は二人にとって辛い出来事だった。メルトダウンした原発事故のため、あかりさんは父親から被曝の恐れがあるから帰って来るなと諭され、帰るに帰れない悶々とした日々が続いた。いてもたってもいられず数週間後、大阪から食糧物資を届けた時、祖父がお礼の代わりにと持っていた三味線を手渡してくれた。

これを機に二人は東北をはじめ各地の民謡と、福島を想いオリジナル曲を創作し始めた。岳陽さんは主にギターと囃子担当。活動拠点は日雇い労働者が多く暮らす日本三大寄場の一つ釜ヶ崎のある西成だ。

九二年夏、二十歳の誕生日。岳陽さんは韓国ハンセン病快復者が暮らす定着村で行われたＦＩＷＣのワークキャンプに初参加した。「今まで学校という均質化した閉ざされた集団の中だけできたので、ワークキャンプという異年齢や多様な背景を持つ人達が寄り合う開かれた集団に出会わなければ、集団の可能性や豊かさを僕は見出せなかったと思う」

釜ヶ崎との出会いは、九三年の大晦日。年末キャンプで盛り上がっている最中、一人釜ヶ崎の越冬の空気を抱えてやってきたキャンパーの話を聞いて以来、毎年労働者の越冬闘争と夏祭りの舞台でスタッフとして演者として参加している。

ＦＩＷＣの阪神淡路大震災救援活動のあと、野本三吉著『不可視のコミューン』に出会う。「自分が関わろうとしている労働者のドヤ問題を運動から入るんじゃなく、野本さんの人間くさい語りから、様々な状況にありながらも生きようとする人達を受けとめ抱きしめていく姿勢に影響を受けた」

子供の頃、川に流され溺れかけた時、ホームレスの人に助けられた体験も深い所で岳陽さんのものの見方に変化を与えたのかもしれない。

ワークキャンプを通して出会った長島愛生園や韓国定着村、釜ヶ崎に生きる人達との出会いを通して、そこから自分が立脚している足元の社会を見つめ返して行った。

「それは僕の中で学校問題と繋がっています。学校や先生と折り合えなかった自分の体験として、学校は異質なものを排除して集団を均質化する場所として存在していた。今あげた僕が出会った人達は、国家や一般社会から排除され困難を生きることを強いられた人達でもあるけれど、それでも何とか生きようとするその力強さに惹きつけられています」

紆余曲折を経て様々な職につき無我夢中で働いてきたのだが、体調を崩し心身が動かなくなり、アパートにこもりがちになってしまった。そんな時、紫陽花邑の人達やＦＩＷＣの仲間にはお世話になったようだ。

心配したキャンパーＯＢの安本雅一さんは、「お前が何に悩んでるのか知らんが、身体で突破できることがあるかもしれん。暇だったら道場に来い」と、岳陽さんを自分が指導する武術の道場に誘い、稽古をつけ、道場に通う子供達の相手をするように促した。

子供と稽古をする様子を見ていた安本さんに、自身が理事長を務める幼稚園の用務員をしてはどうかと勧められ、働くことになって今年で十五年。「毎日違う事に対応していかなくてはいけないところが僕の性に合ってると思います。

僕にとって幼稚園は、無条件に全肯定してもらえた楽しかった思い出しかないんです。親や先生とはまた違う関わりができればと思っています。目の前の子供達の存在をまず全肯定することを大切にしたい」

ワークキャンプで出会ったあかりさんの父親は、戊辰戦争の戦禍で途絶えた会津能を有志と再興し、会津人の悲願だった能楽堂を会津城の敷地内に建立した能楽師。挨拶に伺った時には着替えて出てこられ能管を吹いてくださったという。

「西成は労働力を出す意味で大阪で一番原発に近い町。原発問題は切実な問題です」（聞き手＝李章根）

あじさい日誌

1月12日　午前11時から大倭会館で中村俊哉さんの一年祭。

1月13日　禊会。金沢秀光さん（大阪府堺市）が初参加。生前の法主様に会ったことがあり、『おおやまと』をネットで読んだ由。

1月14日　午前9時から西の斎庭で「大とんど」。恒例通り大根炊きやぜんざい、焼き芋等もふるまわれました。

1月15日　大倭神宮月次祭。小雨のため社務所内にて祭典。

1月19日　午後、交流の家でFIWC定例委員会。

1月22日　午前10時半から拝殿において大倭殖産の事業関係各社の「安全祈願祭」。

1月23日　大倭大本宮月次祭。

この日お聞きしたのは昭和37年1月23日の法話で、平成18年1月号『おおやまと』に「年の初めにあたり」として掲載分。

1月29日　静岡県袋井市の石垣雅設さんと佐伯剛さんが来邑。

2月2日　お祭りが多い2月です。玉の緒祭の福豆炒りは矢追房子・中村千久佐さんが教務本庁でしてくれました。

2月3日　玉の緒祭。お聞きしたのは昭和37年2月3日の法話で、平成18年3月号「マメマメしく暮らす」として掲載分。

2月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

2月9日　午後1時40分、法主奥津城で帰幽祭の開始挨拶。2時から拝殿において祭典が行われました。この日はDVDで平成2年12月23日の日聖祭法話を見て頂きました。平成3年3月号に「宿命について・美津留気について」として掲載分。

こぼれずみ　Uさんの雑談――大倭病院勤務時代に職員旅行でお風呂に一緒に入るように仰せつかり、DVDで法主様が話されていた宿命としての胸の窪みを見たことがあるそうです。

2月10日　禊会。帰幽祭後、大倭会館に一泊して伊藤裕司さん（神奈川県藤沢市）が初参加。AI人工知能等の研究をされているとのこと。

大倭安宿苑では

（菅原園）

1月10日　新年会、お鍋の昼食を楽しみました。

（須加宮寮）

1月24日　地域のお店に頼んで希望食事会を行いました。

（長曽根寮）

1月10日（デイサービス）厨房手作りの松花堂弁当で新年会。

1月24日（特養）10名（内卒寿1名）の方の誕生をお祝い。

（茂毛蕗園）

1月29日　定例懇談会には9名が参加して施設長とお話しをしました。

（八重垣園）

1月25日　18日の予定を1週遅れで、年に一度の初釜。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

3月6日(水)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催第602回禊会

3月10日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）

3月15日(金)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大本宮）

3月23日(土)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

ボランティアグループ

「あじさいの箱」第36回懇親会

ご自由にご参加を！

平成31年3月16日（土）11時～14時

■ 大倭会館にて

■ 会　費：1500円（昼食代）

（昼食要予約　且田0595-68-4108まで）

＊大倭安宿苑常務理事・矢追明昌さんのお話

＊活動報告他

見田暎子さんが帰幽されました

昨年末から自宅療養を続けておられましたが、去る1月27日午後7時37分に帰幽されました。昭和15年に栃木県で生まれ、満78歳でした。法名は神倭玄功恵古比女命（かむやまとげんこうえいこひめのみこと）。

大本宮拝殿で、教長・矢追家麻呂さんを祭主、喪主を高橋良美さんとして、1月30日午後7時から前夜祭、31日午前11時から帰幽祭、午後5時から大倭会館で五日祭が行われました。

昭和49年に法主様に出会い、その後も法主様ご夫妻の佐渡や東北の旅に高橋さんと共に同行するなど絆を深めていきました。平成6年末に紫陽花邑の邑人となり、手技治療の玄徳院を営みつつ、法主様の最晩年のお世話や、毎朝の大倭神宮の参拝・清掃や大倭の諸神事に熱意をもって取り組んでこられました。

本紙昨年2月号の「寸莎」で取材した時の見田暎子さんは大変お元気でした。それが今年4月号で追悼特集を組むことになるとは夢にも思いませんでした。10月中頃に肝臓ガンが見つかった事実をオープンにされて以来、残された日々を迷わず前向きに過ごされる姿を見せて頂きました。

（編集部）

表紙写真について

「阿蘇自然守り隊」事務局　中島　一美

私は栗山美智子さん（熊本県南阿蘇村）の友人で、一緒に活動をしている者です。

写真は阿蘇五岳の一つで五岳の中で唯一活発な火山活動を続けている「中岳火口」です。火口の中には現在、強酸性の湯だまりがあります。（いつもあるわけではなくて、干上がって火山灰を噴き上げたり、噴火したりを繰り返している。温度は、およそ50℃から70℃位。標高1506メートルで、五岳では高岳に次ぎ2番目に高い）

この中岳は2016年10月8日に大噴火し、阿蘇山頂西駅は壊滅的被害を被り、ロープウエーは運行中止となりました。そして残念ながら撤去されることになりました。阿蘇の観光にとって大変残念なことです。今後再建されることを祈りたいと思います。

これも自然災害が元凶になっております。自然は我々に大きな恵みを与えてくれますが、時に牙をむき、我々をどん底に突き落とします。自然災害が多い昨今、我々は自然の脅威を踏まえ、過去の歴史に学びながら知恵を出して、いかに自然と上手に共存するか！ということを考えて行く必要があると思います。